

オルソケラトロジーの年齢制限について

つい最近のことですが、12月10日発行の日本眼科学会雑誌（日本の眼科で一番権威のある論文誌）に、オルソケラトロジーガイドライン第二版が掲載されました。2009年の第一版から8年ぶりの更新です。一番注目されているところは、年齢制限の部分です。今までは、「患者本人の十分な判断と同意を求めることが可能で、親権者の関与を必要としないという主旨から20歳以上とする」でしたが、最後の部分が変わって「20歳以上を原則とする。20歳未満は慎重処方とする」に変更されました。

諸外国では、近視進行抑制のために主に未成年者に使われているのが現状で、大人になればLASICをすればいいとか、コンタクトレンズでいいじゃないという流れになっています。

最近の研究では、アジア人の中でも、東アジア人の20歳における近視の発現率が75%と世界で最も高く、アメリカ人でも25%なのを見ると、とんでもなく近視率が高いのが分かります。世界を見渡すと、低いところでは、5%程度の地域もあります。

やはり近視は、生活環境が発症に関与している文明病だということが言えると思います。

さらに、私の眼科20年の経験では、両親のどちらかが近視があると、高確率で子供は近視になり、また親の近視の度数を越えていくことが多いです。

子供の近視が早い時期から出てきて、それが予想よりも強い度数であれば、親であれば心配するのは当然と考えます。オルソケラトロジーは、確かな理由はまだ分かっていませんが、近視の進行を予防することができる数少ない選択肢の一つです。

ただし、処方できる条件がいくつかあります。当院では体の大きさ（顔の大きさ）から考えて、9才以上に処方しています。緩い近視では、焦らずにもう少し大きくなるのを待つことも多いです。12才前後になると、かなり安心して処方することができます。

また、細部は違いますが、材質などはハードコンタクトレンズと同じですから、装用するとかかなりゴロゴロします。慣れれば、大概の方は出来るようになりますが、どうしても無理な人もいます。間違った装用、不潔な取扱いをすれば、角膜に傷もつきますし、感染を起こす可能性があります。ですので親御さんの管理は絶対に必要ですし、処方後は、定期的に見せてもらう必要があります。

近視が-5.0Dくらいまでであれば、85%くらいの方で、裸眼視力が1.0に到達します。眼鏡なしで良く見えるようになるのは、診ていてとても気持ちのいいものです。しかし、眼科医側からすれば、角膜に傷がついているのではないかと毎回診察のたびにドキドキしているのも確かです。慎重に処方し、慎重に確認するというのが、この驚きのシステムを幸せに利用していくために不可欠だと考えます。

興味のある方は、予約のお電話をいただき、オルソが目にあっているかどうかの判定およびテストレンズの装着をしてみることをお勧めいたします。（自費で税込5400円）

一時間半ほどかかりますので、時間に余裕を持ってお越しください。